様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０１８４
研究課題名（和文）生命地域主義の視点に立つアメリカ文学における環境意識の研究

研究課題名（英文）A Study of Environmental Consciousness in American Literature in Terms of Bioregionalism

研究代表者
星野　勝利　（HOSHINO KATSUTOSHI）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：90003962

研究成果の概要：アメリカ文学に見られる場所と人間の関係、および自然と社会・経済との関係について、生命地域主義の視点、特にそこに見られる＜共生＞の思想に焦点を当てることで再検討し、ニューイングランド文学に見られる再定住の意識の形成、19 世紀アメリカ女性作家の環境意識、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムの理論的融合、生命地域主義と現代社会との関係といった検討課題の内容を一定程度明らかにすることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　文学　　英米・英語圏文学
キーワード：英米文学

１．研究開始当初の背景

（1）エコクリティシズムの視点に立つ文学研究や環境文学を扱った研究は、日本でも近年活発に行われてきたが、その多くは文学作品における風景と表象と美学の問題、環境文学やネイチャー・ライティングにおける自然観、文学作品に見られるエコロジー思想、自然や土地のメタファー分析、アポカリプス言説などに焦点を当てたものであった。

（2）本研究グループは、これまでのエコクリティシズムの成果を踏まえ、主に現代アメリカ環境文学における「場所の感覚」を中心として研究を進め、平成 18 年 3 月に「現代アメリカ環境文学におけるエコクリティシズムと『場所の感覚』についての研究」をこの間の研究成果として報告した。しかし、グループ内での共同研究・共同討議やシンポジウム等での議論を通して、「場所の感覚」を個別的な限定された場所ではなく、さらに広い視野からの再検討、特に環境思想における「生命地域主義(bioregionalism)」の概念を軸にして検討することの必要性と文学研究としての新たな可能性を認識した。

（3）本研究グループが過去においてテーマとしてきた「場所の感覚」は、＜わたし＞と＜私の住む場所＞との間に認められる固有

の関係を重視する。それに対し、「生命地域主義」は、「場所」を個人のアイデンティティの母体として捉えるだけでなく、広域的な自然環境や、社会的・経済的なネットワークとの関わりの中で考えようとする。この思想は、自分が住む地域とのつながりを再認識して、Gary Snyder の言う「再定住(reinhabitation)」を図るという点で「場所の感覚」と重なる点を内包している。

(4) 一方、「生命地域主義」は、＜私たち＞が住む生命地域を、閉じた場所としてではなく、＜他者＞が住む生命地域とつながる場所として捉える視点を併せ持つ。特に、個々の地域が単独では存在し得ず、他の地域とのつながり（融和的つながりと対立的つながりを共に含む）が大きな意味を持つ現代にあっては、「生命地域主義」思想は、＜私たち＞のと＜彼ら＞の生との間に成り立つ＜共生＞の在り方を重視する点で、また自然環境が社会環境や経済システムと関連しているという視点を提供してくれる点で、極めて今日的な思想である。

(5) 以上のような「生命地域主義」の考えは、文学作品研究の上で極めて有意義な問題意識を提供してくれる。たとえば、研究対象を環境文学やネイチャー・ライティングに特化する傾向のあるエコクリティシズムには自ずと限界があるのではないか。自然の問題が前景化していない作品にこそ環境問題が現在直面している様々な問題が透けて見えるのではないか。エコクリティシズムのエコロジー思想は西洋（特にアメリカ）中心思想であり、そこに第三世界の自然破壊の問題などがどれほど取り込まれているか。このような問題意識は、「生命地域主義」、特にそこに現れた＜共生＞の思想を軸にすることで、従来のエコクリティシズムとは異なる新たな観点からの文学作品研究の可能性を示唆するものである。

(6) 以上の観点から、環境倫理における「生命地域主義」の考え方を検討・整理し、アメリカ文学における場所と人間の関係および自然と社会・経済の関係を再検討することが本研究の主たる目的である。ただし、この場合の関係性とは、個別的な関係を含みつつもそれを拡大した「ネットワーク」的な関係を意味する概念であり、自然、歴史、科学、経済的ネットワークなど、特定の時間と空間をつなぎ合わせる広く多様なコンテキストの中に、アメリカ文学のテキストを位置づけるものである。「生命地域主義」を軸にしたこのような視点からの文学研究が、アメリカ文学についての新しい解釈をもたらす可能性がある。

２．研究の目的

(1) 本研究は、「生命地域主義」、特にそこに現れる＜共生＞の思想の視点に立って、アメリカ文学に見られる場所と人間の関係、および自然と社会・経済との関係を再検討することを目的とする。

(2) 日本で行われているエコクリティシズムがその研究対象を環境文学やネイチャー・ライティングに特化する傾向があるのに対し、「生命地域主義」の視点に立つ文学研究は、自然の問題が前景化されていないと思われる作品の中にも、現在の環境問題が直面している様々な問題（経済発展と自然の関係、都市化と自然保護との関係、西洋の経済活動と第三世界の環境破壊との関係など）が内在しているものとして捉える。

(3) これについて、3 名のアメリカ文学研究者に環境思想史の専門家 1 名を加え、「生命地域主義」の思想を環境思想の文脈で整理・検討し、その知見を基にして、ニューイングランド文学における再定住の思想、19 世紀アメリカ女性作家の環境意識、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムの理論的融合といった課題にアプローチし、最終的に、「生命地域主義」思想が現代社会に対して持っている意義と有効性を提示することを、研究の具体的目的とする。

３．研究の方法

研究分担者 4 名が、下記 4 つの課題についてそれぞれ研究を進めた。また、定期的な読書会や報告会を通して各自の研究の相互理解と進展を図るとともに、研究発表（20 年 10 月、東北英文学会）やシンポジウム（20 年 12 月、日本アメリカ文学会東北支部例会）を通して、各自の研究と本研究全体の進展と深化を図った。

(1) ニューイングランド文学と再定住

初年度（19 年度）の研究では、ブラッドストリート、バートラム、クーパー、エマソン、ソーロー、メルヴィルなお、植民地時代から 19 世紀中葉に至るまでのニューイングランド文学の「場所の感覚」について、その生成の過程と特徴を調べた。次年度（20 年度）の研究では、バロウズのエッセイの分析を通して、19 世紀後半から 20 世紀前半に至るまでニューイングランド文学の「場所の感覚」や「生命地域主義」との関係を調べるとともに、アメリカ西部の「荒野」（ウイルダネス）やアラスカの自然と深く関わったミュアとの対比を通して、「場所の感覚」が内包する意味や、「生命地域主義」や「再定住」との関係性について検討した。

（2）ポストコロニアリズムとエコクリティシズム
初年度（19 年度）は、Peter Berg と Raymond Dasmann の論文を手掛かりにして、生命地域主義の思想・運動が登場してきた歴史的背景、生命地域主義が環境思想において占める位置、それが目指すべき社会像などについて検証・整理した。次年度（20 年度）は、local な環境問題と global な環境問題との関係を検証するため、生命地域主義の理念と運動をグローバル化する世界経済の中に位置づけ、生命地域主義がグローバル社会において持つ意義とその限界について考察した。特に、第 3 世界の経済活動と環境問題について積極的な発言をしている Ramachandra Guha の論文を手掛かりにして、先進国と後進国との間にある経済格差と、それを解消するための経済発展の在り方について考察を加えた。

（3）環境主義とディープ・エコロジー
初年度は，ディープ・エコロジーと生命地域主義の主要文献を調べながら，全体論的世界観のおける人間と場所の関わりについて考察した。次年度はアルネ・ネス，ピーター・バーグ等の関係論文の解釈を進め，場所，場所の感覚，場所との一体化，生命地域，再定住といった基本概念の意味内容を精査することで，ディープ・エコロジーと生命地域主義との異同を踏まえ，両者が環境思想として有する可能性を検討した。

（4）19 世紀アメリカ女性作家の環境意識
2 年間をとおして、19 世紀アメリカ女性作家の作品における環境意識をつぎの 2 点をもとに考察することを目的とした。第一に、「家庭」の役割を当時の家政学を視野に入れながら考察した。「キッチン」、「料理」などの家庭で日常的に営まれる「小さく単純な行為」をとおして、家庭がそれを越えた社会や生態系の営みというより大きなネットワークにつながっているかを具体的な文学作品から読み取った。この方法により、家庭という狭い領域を扱うと一般的に解釈されている「家庭小説」や家事アドヴァイス本の新たな環境意識を明らかにしようとした。
第二に、ネイティヴ・アメリカンの女性作家作品にみられる環境意識を探るために、アメリカセドナにおいて現地調査をした。各々の族を越えて彼らの思想に共通にみられる環境意識には大地や空という自然環境や、個人を共同体の一員ととらえる様々なネットワーク思想に基づいていることを体感した。現実の自然環境を視察するだけでなく、彼らの儀式にも参加することで、ネットワークが日常生活にどのように生かされているかも理解することができた。2 年間の経験をとおし、多様なエスニシティ作家が構成するアメリカ文学をネットワークという概念を用いて考察することで、新たな環境意識を追及する基盤を作った。

４．研究成果
（1）アメリカ文学に見られる「バイオリージョナリズム（生命地域主義）」の思想的な基礎が、植民地時代以来のニューイングランド文学に特徴的に認められるのではないかという観点から、アメリカ最初の女性詩人ブラッドストリート、宣教師ウルマン、旅行記著者バートラム、作家クーパー、超越主義者エマソンおよびソーロー、作家メルヴィル等の作品を検討し、それとの関連性を跡づけた。また、19 世紀から 20 世紀にかけてこの思想を受け継ぐものとして、ニューイングランドのエッセイストであるジョン・バロウズのエッセイについて、特に西部カリフォルニアに定住したジョン・ミュアとの関連性を通して検討し、そこに見られる「場所の感覚」が、「生命地域主義」とも深く関わるものであることを確認した。このような研究は日本では従来あまりなされてきていないものであり、今後の研究の発展に寄与できるものと思われる。（星野）

（2）Peter Berg と Raymond Dasmann が唱導した生命地域主義の運動は、環境破壊を防ぐという立場を超え、破壊された環境を修復して「望ましい」生活環境を創造する運動であること、また、その思想には、近代社会の中核となる「産業主義」を否定する考えを内包していることを検証した。そのいっぽうで、生命地域主義が現在の環境保護運動において一定の成果を生みながらも、多国籍企業、超多国籍企業による経済活動については少ない関心しか寄せていないこと、また先進国と後進国の間にある政治的・経済的ヘゲモニーについても考慮が足りないことを検証した。しかしながら、生命地域主義の思想は、その中に新たな「市民社会」の創造という観点を継ぎ木することで、グローバル化する世界の問題を解決する契機が得られることを確認した。（齋藤）

（3）生命地域主義とは，自然生態系と断絶する仕方で肥大し人間の尊厳と環境の持続可能性をともに破壊するに至った近代社会を転換し，社会正義と環境の持続可能性を実現する仕方で，再び地域生態系に人間とその暮らしを結び直そうとする反中央集権的なコミュニティ思想・運動の総体を意味する。しかし、その反中央集権的性格・実践志向のゆえに，思想としては明確な定義と体系的理解に欠くところがあり，未だに全体像を捉え

た研究は皆無に等しかった。そこで生命地域主義を思想として吟味する作業として，まずその基本概念を調べた。例えば，「生命地域」の意味内容については，個々の生命地域主義者により，地域の基盤となる生態系を重視するか，そこで形成されてきた生活・文化・歴史を重視するかで理解が異なり，したがって生命地域主義の性格もかなり異なっていることが分かる。こうした思想的吟味は生命地域主義運動の実践の陰でこれまで軽視されてきた傾向がある。そこで，「生命地域主義の語られざる基礎」（セール）であると評されるディープ・エコロジーとの親近性・差異を「場所との一体化」の観点から考察することによって，生命地域主義の環境思想としての輪郭とその展開の可能性がより明瞭に確認できる。その結果から，生命地域主義が土地での生活・社会に定位するのに対して，ディープ・エコロジーは内面的・精神的な自己変革を目指す点で，両者の方向性は対照的であるといった一般的解釈は退けられることになる。また，両者に共通する「人間と自然の関係に対する全体論的見方」の先駆であるアルド・レオポルドの土地倫理が，両者の理解を媒介する有益な示唆を与えてくれると考えられる。（開）

（4）Louisa May Alcott の『若草物語』、Catherine Beecher と Harriet Beecher Stowe 姉妹による『The American Woman's Home』をテキストに考察を行った。彼らのテキストから、社会から隔絶した空間として「家庭」が存在したのではなく、それがアメリカという国家の中心となる思想を生成していた場所であるばかりか、環境を含めたネットワークへとつながる、核となる領域としての機能であることを明らかにした。アメリカ文学作品における自然や環境の主題はかなり論じられているが、一見それらを扱っていない小説作品にも、作家の思想形成の基盤にネットワーク意識があることが明らかとなった。

たとえば、家庭をおもな領域としている作品にも環境や社会というその領域を超えたネットワークとつながっていた。またネイティヴ・アメリカンたちの思想の前提には個人が様々なネットワークと関連しているという認識があるため、作品に表象するまでもなく、作品の背後にある意識を読み取る作業が必要であることも理解できた。アメリカ文学の多様な作品に、直接書かれてはいないが、ネットワークという関連性を見ることで新たな一面を見ようとする視点ができたと思う。（秋田）

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）

①秋田淳子、*The American Woman's Home* についての一考察：環境への提言、東北アメリカ文学研究、第 32 号（日本アメリカ文学会東北支部）、査読有、（現在印刷中）

②星野勝利、コディアックとリバビィ―ジョン・バロウズと「場所の感覚」、岩手大学英語教育論集、第 11 号、79-96、2009、査読なし

③星野勝利、新世界との対峙―ニューイングランド文学とバイオリージョナリズム、岩手大学英語教育論集、第 10 号、101-115、2008、査読なし

④開　龍美、管理術としての土地倫理―アルド・レオポルドの環境思想の一側面―、アルテス・リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）、第 81 号、159-178, 2007、査読なし

〔学会発表〕（計　４　件）

①秋田淳子、*The American Woman's Home* についての一考察：環境への提言、日本アメリカ文学会東北支部、2008 年 12 月 20 日、　岩手大学

②開龍美、＜場所との一体化＞の概念について――生命地域主義とディープ・エコロジーをつなぐもの、日本アメリカ文学会東北支部、2008 年 12 月 20 日、岩手大学

③星野勝利、ジョン・バロウズとバイオリージョナリズム、日本アメリカ文学会東北支部、2008 年 12 月 20 日、岩手大学

④秋田順子、「若草物語」4 作品におけるＬｏｉｓａ Ｍａｙ Ａｌｃｏｔｔの自然描写についての一考察、東北英文学会、2008 年 11 月 23 日、東北学院大学土樋キャンパス

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）
○取得状況（計　０　件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

星野勝利（HOSHINO KATSUTOSHI）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：90003962

(2)研究分担者

齋藤博次（SAITO HIROTSUGU）
岩手大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：90180801

開　龍美　（HIRAKI TATSUMI）
岩手大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：50181152

秋田淳子　（AKITA JUNKO）
岩手大学・人文社会科学部・講師
研究者番号：10251688

(3)連携研究者

なし